

2005年度「とやまの北前船」

2005年度「とやまの北前船」普及啓発事業「日本海学グループ支援事業」
日本海北前ロマン回廊構想実行委員会

目 次

1. 事業の趣旨	1
2. 実施内容	1
【第1編 北前船とは】	
①北前船の由来	2
②北前船の拠点と廻船問屋	3
③北前船の役割の変遷	4
【第2編 今に残る北前船】	
①港町の廻船問屋	5
②北前船の様々な史料	6
③身近な北前船遺構	7
【第3編 北前船の果たした役割】	
①藤井能三の活躍	9
②築港と河川改修	10
③文化の普及	11
④諸外国との接触	12
⑤北前船の富と産業形成	13
⑥北前船文化の群像	14
【第4編 北前船の活用】	
①先人の英知を学ぶ	15
②活力ある地域づくりに活かす	16
③次世代へ保存し継承する	16

2005年度「とやまの北前船」

2005年度「とやまの北前船」普及啓発事業」日本海学グループ支援事業
日本海北前ロマン回廊構想実行委員会

1. 事業の趣旨

近世後期から近代前期にかけて、本県は北前船のもたらす富で潤い、活気に溢れ、社会資本が整備され、様々な文化が流入した。

しかし、今日、その遺構は失われ、人々の記憶からも遠い存在となっている。今まさに、この失われようとしている大事な歴史的な遺産を明らかにし、富山県の次世代を担う子どもたちに普及啓発することにより、先人の英知を学び、未来への発展の礎として活用しようとするものである。

2. 実施内容

(1)「ジュニア版 とやまの北前船・DVD」の制作(H17県自作視聴覚教材コンクール奨励賞受賞、H18全国視聴覚教材コンクール入賞)・DVD版、21分のボリューム(写真映像とその解説による視覚的データで構成)・県内の小・中学校や関係機関に配布。

(2) 県内の北前船関係遺構の調査・伏木地区の現地踏査・新湊地区の現地踏査 *
石川県門前町の北前船湊町の現地踏査も実施。

(3) 地域住民との交流・事業主体である実行委員会と地区の住民との意見交換会の開催
・同じく、実行委員会と地域住民による遺構把握調査の実施。

3. 「ジュニア版 とやまの北前船・DVD」について

この作品は、平成18年度全国視聴覚教材コンクール(主催・財団法人日本視聴覚教育協会)で入賞しました。

(1) 仕様等・体裁 DVD(約21分)・素材 北前船の遺構、史料、活用状況等の写真・手法静止画とナレーションによる表示・構成

第1編 北前船とは

第2編 今に残る北前船 第3編 北前船の果たした役割 第4編 北前船の活用(2)

【第1編 北前船とは】①北前船の由来②北前船の拠点と廻船問屋③北前船の役割の変遷

【第2編 今に残る北前船】①港町の廻船問屋②北前船の様々な史料③身近な北前船遺構

【第3編 北前船の果たした役割】

①藤井能三の活躍／②築港と河川改修／③文化の普及④諸外国との接触／⑤北前船の富と産業形成／⑥北前船文化の群像

【第4編 北前船の活用】①先人の英知を学ぶ／②活力ある地域づくりに活かす

③次世代へ保存し継承する

【第1編 北前船とは】

①北前船の由来

ア／名称の由来と活躍した時代の、「北前船(きたまえぶね)」とは、江戸時代中期から明治・大正時代にかけて、日本海沿岸の西廻り航路で、商品の運搬に使用された廻船のことで、日本海沿岸地域で「バイセン」、「ベザイセン」、「センゴクブネ」などと呼ばれた。

北前とは、上方からみた「日本海沿岸地域」をさした用語で、「北陸の前の海」という意味である。富山県では、一般的に「バイセン」と呼ばれているが、その語源については、売買を行なう船であることから、利益が倍増することから、弁才船であることから、「弁財天を祀る船」であることから、などの諸説がある。

この船が最も活躍した時代は、江戸時代末期から明治時代前期にかけてであり、「北海道開発」と交易の確立、米を含む流通商品の多角化と、「安定供給」、藩による「地方廻送業の育成」などに起因するとされる。

安定した流通経済のもとに、地域の「廻船業者」が成長し、湊の整備がなされた結果、廻船問屋に大きな利益がもたらされ、この富は、やがて「近代産業育成」のための資本(銀行、保険、建設など)として活用されていくことになる。

イ／業務の内容と運搬品北前船で、運ばれた主な産品をみると、北海道へは、「米、縄、むしろ」などの、農産品や酒などが、北海道からは、「鯨、昆布、鮭、鱒」などの海産物が運搬された。

大阪へは、主に米が積み出され、上方や瀬戸内海の地域からは「綿、塩、砂糖」などが運搬された。こういった商品は、沖船頭(船長)の判断により、寄航した湊で随時、売買が行なわれた。

この方式は、「買積み船」と呼称され、運送業務の「賃積み船」とは区別される。

一般に「千石船一航海で千両」などといわれているが、造船に大きな資本を必要とし、さらに海難や商品の売損などの頻度も高いことから、浮き沈みの多い業種ともいわれている。

ウ／船の構造としては、江戸時代前期から中期まで日本海沿岸で用いられた「和船」は、「北国船」と「ハガセ船」の2種類である。「北国船」は、船首が丸く、船底がオモキ造りで、帆と櫂が併用され、多くの漕手を必要とした船である。

「ハガセ船」は、船首が鋭く反り、船底がオモキ造りで、船底が浅く、むしろ帆と櫂が併用された船である。江戸時代の中期には、「ベザイ船」が使用されるようになる。

これは、瀬戸内海で、用いられていた船で、厚い船底材に厚い外板をはぎつけ、船梁を入れ、船首を反らせ、ずんぐりとした船体を呈する。

「北前船」とは、「日本海側」から「大阪湾」へ航行してきた「ベザイ船」をさしている。

②北前船の拠点と廻船問屋

ア／富山湾沿いの湊町越中の北前船の拠点として、富山湾沿いの「河東七浦」と呼ばれる「東岩瀬、水橋、滑川、魚津、生地、泊、境」が、「河西七浦」と呼ばれる「木町、伏木、六渡寺、放生津、海老江、氷見、灘浦」が主要な湊町として栄えた。

とりわけ、伏木、新湊（放生津、六渡寺など）、岩瀬（四方、西岩瀬、東岩瀬）、水橋（西水橋、東水橋）に、「大きな廻船問屋」が集中した。

イ／伏木地区高岡市伏木は、小矢部川と庄川が合流した、「旧射水川」の河口に立地した湊町である。

江戸時代中期には、砺波平野の産物を積み出す拠点として繁栄した。1661年～1673年（寛文年間）には、「鶴屋善右衛門」ら八軒の船問屋が存在した。

天保3年（1832）になり、水主の宿である、「小宿9軒」が「船問屋」同様の取引を願い出ており、廻船業の繁栄を知ることができる。

ウ／新湊地区の「射水平野」を流れる多くの河川は、「放生津潟」に流れ込み、運河状の内川を経て日本海に注ぎ込む。江戸時代には、「放生津町、六渡寺村、海老江村」などが、「北前船」の拠点として栄えた。

新潟県「寺泊町」の住吉家に残る「御客帳」には、当地に関わる廻船業者として、「放生津」の「綿屋彦九郎」など「55軒」と、六渡寺の「湊屋清三郎」など、「45件」の記録がある。

エ／岩瀬地区東岩瀬は、神通川河口に立地した湊町である。寛文10年（1670）に、加賀藩の米倉である「御蔵」が設けられ、富山平野で生産された米が、上方へ積み出されていた。

江戸時代安政5年（1858）までに、存在した船問屋として、「道正屋八兵衛」や「四十物屋仙右衛門」など「5軒問屋」が確認でき、安政6年には、「犬嶋屋仁兵衛」など「20軒」が「諸廻船問屋」として記録されている。

一方、富山藩の唯一の積み出し湊として、重要な役割を果たした「神通川左岸地域」では、文化5年（1808）の富山藩による船舶調査で、四方地区で、「120石」を最高の石数とした「16艘」の北前船が、西岩瀬地区で、「450石」を最高の石数とした「28艘」の北前船が確認されている。

オ／水橋地区水橋は、旧水橋川の河口に形成された湊町である。当時の白岩川は、この常願寺川に合流し、「水橋川」となっていたことから、白岩川を利用した、「内陸水運」の拠点として重要な役割を果たした。

また、加賀藩の米倉である御蔵も設けられ、江戸時代後期には北前船の拠点のひとつとなっている。安政6年（1859）の「船手商売」として、東水橋に、「四十物屋弥右衛門」ら8軒が、西水橋に、「石黒屋権七」ら40軒が記録されている。

③北前船の役割の変遷

ア／江戸時代前期～中期加賀藩による、海運での上方への「藩米運搬」で最も古い記録は、天正18年(1590)に若狭を經由した「大津方面」への輸送である。

寛永16年(1639)には、中国地方と瀬戸内海を通して、船運のみで大阪まで輸送する「西廻り航路」が加賀藩により開拓された。

正保4年(1647)以降は、上方の雇船が藩米の移送を行った。加賀藩は大阪への藩米輸送にあたり、「伏木、吉久、東岩瀬や水橋」などの良好な湊に、米を集積するための「御蔵」を設け、海運による迅速な運搬を試みている。

江戸時代前期の藩米の大阪輸送には、上方商人があたっており、在地の廻船業の未成熟を知ることができる。

イ／江戸時代後期～明治時代前期には、江戸時代中期からは、「新田開発」が盛んとなり、後期になると農業生産の一層の安定とともに、農産物の種類が増加し、収穫量も増大するようになる。

これにより、運送業の活性化がもたらされ、海運業者に新たな活路が提供された。

加賀藩は上方商人による大阪廻送を、藩の直接雇用船で行うよう制度をあらため、地元の廻船業の育成を図った。

1804～1830年(文政年間)には、大型船の建造奨励と、浦方以外の有力者にも渡海船の所有を認めることとしている。また、北海道との交易もこの頃に活発化された。

江戸時代末期には、船宿業を営む者や漁行商を営む者などが北前船を所有するようになり、北前船の黄金期を迎えた。

ウ／明治時代中期明治時代の前期には、伏木の「藤井能三」により、汽船の誘致や電信の架線などの、近代的な取り組みがなされ、既に北前船による運送手法は、かげりを見せはじめる。

明治8年(1875)の8月には、「能三」の尽力により、三菱会社の瓊浦丸と豊島丸が、伏木港へ西洋型汽船として、初めての入港を果たした。

時代の変遷に応じた、効率的で安定した海運業として発展していくために、「北陸通船会社」などの汽船会社の設立と、運営に投資され始め、「藤井家」に加え、新湊の「宮林家」や東岩瀬の「馬場家」などの、巨大な資本が投入されていった。

明治20年代には、新湊の「南島商工」や東岩瀬の「馬場汽船」に代表される本格的な「汽船時代」を迎えることになった。

エ／明治時代後期～大正時代明治40年の「新湊商工会報」には、「・・・海運業は挙げて汽船に独占せられ、倭船は茲に一大打撃を蒙りて、俄然廃業するもの続々と輩出し・・・」と記されている。

汽船の登場や鉄道の整備による、輸送手段の近代化、日本の都市や農村での、「産業構造」の変化などにより、賑わいと巨大な資産を生み出した、「北前船」はここに終焉を迎えることになった。

【第2編 今に残る北前船】

①港町の廻船問屋

ア／伏木地区【旧秋元家住宅】：現在、高岡市伏木北前船資料館となっており、修復された建物の内部が、北前船や伏木港の関係史料とともに公開されている。

【棚田家住宅】：明治時代中期の木造切妻造り平入りで、他に茶室や3棟の土蔵などもある。内部は豪壮な小屋組を見せた「ワクノウチ」となっている。

【浜谷家住宅】：木造中二階建平屋入りで、正面上部は白漆喰の真壁となる。4間の出格子が往來に面し、典型的な町屋構造を持つ。

【高岡商工会議所伏木支所】：明治43年に、「伏木銀行」の社屋として建てられた。土蔵造りで寄棟造りの建物で、上げ下げ窓やコリント式の柱など洋風の意匠が採用されている。

イ／新湊地区「宮林家住宅」は、江戸時代末期から明治時代にかけて、「県下屈指の廻船問屋」として勢力を誇った。

屋号を綿屋と称し、「2,200石もの土地」をかかえ繁栄した。

新湊地区汐海家は、江戸時代末期には、大きな廻船問屋に成長した。建物は木造中二階建てで、正面間口は5間を計る。典型的な町屋の様相を呈する。

【旧南島商工本店】：大正4年(1915)に建てられた木骨煉瓦貼2階建てで、緑の屋根、褐色の煉瓦面、その間に埋め込まれた御影石の色彩が見事なコントラストを示す。

「八島倉庫」の八島家は、明治時代の後期に、漁具などを保管する倉庫を建設し、大正時代に、伏木港右岸に倉庫を建設し始め、昭和になってから本格的に倉庫業へ転換していった。

ウ／岩瀬地区の「旧森家住宅」は、国指定重要文化財で、北前船やに関する史料が展示、公開されている。建物は、明治11年に建てられた、木造切妻造りの平入りで、2棟の土蔵が附属する。

「馬場家住宅」は、寛政年間には県内屈指の廻船問屋として成長し、明治時代後期には「馬場合資会社」を設立し、汽船による廻船業へ進出した。

「米田家住宅」は、江戸時代末期の安政年間には、廻船問屋を営んでおり、北海道へ米を運搬し、魚肥を購入して、県内屈指の地主として発展した。

「旧岩瀬米蔵」は、4棟の建築年代は定かでないが、最も古い棟は江戸時代後期の可能性が指摘されている。頑強な木造の土蔵造りである。

エノ水橋地区の「石金家住宅」は、北海道との交易で肥料商として成長する。建物は、1912年（明治45年）に、建てられた木造切妻造り2階建ての平入りで、座敷棟、茶室と「5棟の土蔵」が附属する。

「尾島家住宅」は、家業は網元で、廻船業も営んでいた。現在の建物は改築されたものであるが、平成元年の調査によれば、かつての建物は18間の間口と巨大であった。

「堀田家住宅」は、建物は明治26年（1893）に建てられた。木造2階建て平入りで、内部は前庭についた「2列3段型」のこの地域に伝統的にみられる良質の町屋である。

「山田家住宅」は、建物は、1897年（明治30年代）に、建てられたと考えられており、木造2階建て平入りで、中庭をはさんで奥に、「土蔵が2棟」附属する。

②北前船の様々な史料

アノ伏木北前船資料館（旧秋元家）

【引札】：江戸時代中期から明治時代にかけて、廻船問屋によって作られた広告用のチラシである。

【船筆筒】：水主などが航海中に書類、衣類や金銭を収納した木製の箱を船筆筒といい、海水がしみ込まないように強固な補強がなされている。

【船鑑札】：木板に墨書された船鑑札は、北前船を所有した船主の住まいした藩が発行した船籍証明書である。

【伊万里茶碗】：秋元家には、祝い事などのハレの際に用いられた、「伊万里焼き」の食器類が大事に所蔵されていた。鮮やかな文様が描かれた優品で、碗、小皿、大皿などがある。

イノ新湊市立博物館

【ワラ製船霊】：汐海家に所蔵されていた「ワラ製帆船」は、明治時代に造られたもので、舟の守護神である。豊漁の際と起舟祭に用いられ、船主宅の大広間の梁につるされた。

【模型和船船霊】：柴屋に所蔵されていた、北前船「長船丸」（600石積）の木製の模型は、「長さ3.5m、幅1.3m」を計る大きなもので、江戸時代末期の作品である。

【船磁石と望遠鏡】：江戸時代の測量学者「石黒信由」の関係史料の中に、航海に使用された磁石がある。望遠鏡は、大阪の岩橋源兵衛が製作したもので、江戸時代後期のものである。

【幟旗】:「永榮丸」と「寿榮丸」と書かれた2本の幟旗は、明治時代に作られたものである。頑丈な布地に、大きく墨書されている。

ウ／旧森家

【梁組】:オイの間の天井は、豪壮な梁組(ワクノウチ)の構造を持つ。太い梁が縦横の二重に組まれ、材はきれいに磨かれている。訪問者を意識した見せ場となっている。

【スムシコ】:表構えはスムシコの出格子となっており、割り竹を編んだ目の細かなもので、外からは内部は見えないが、内部からは外の様子をよく窺うことができる。

【部屋割】:前庭のある、「三列四段型」の部屋割り様式である。透かしの入った「板欄間や棹縁天井」など、洗練された意匠が用いられている。

【土蔵】:奥には、土蔵が2棟ある。2棟をつなぐ蔵前が設けられ、ひとつの部屋としての構造でもある。戸前土扉は龍と虎の鍍絵で装飾されている。

エ／旧水橋郷土資料館【加徳丸模型】:石金家が所有した加徳丸の模型で、この北前船は、江戸時代中期から大正時代初期にかけて活躍した、「越中で最大の千石船」とされる。

【松右衛門帆布】:和船の帆には、箆を用いた「箆帆」、麻を用いた「麻帆」、綿を用いた「綿帆」がある。この帆布は、播州高砂の「工楽松右衛門」によって製造されたものである。

【帆縫い用具】:北前船の帆に用いられた「丈夫な布」の細工には、技量と道具が重要であった。縫い合わせには太い麻糸が用いられ、耳の大きな針、強固なはさみなどが常備された。

【「石黒屋権吉」掛軸】:石黒屋権吉は、長者丸で漂流し帰国した「次郎吉」らを厚岸で親切にもてなした北前船主である。石黒家は廻船業と売薬業で財をなしたとされる。

③ 身近な北前船遺構

ア／伏木地区

【藤井能三の銅像】:伏木小学校の校庭に、昭和27年に創校80周年を記念して現在の銅像が造られた。御影石の台石の上に左手を腰にあて、遙か遠くを望む穏やかな顔の能三が建てられている。

【藤井家の門】:高岡伏木図書館の敷地内に、かつて「藤井能三」が住まいした居宅の門が、保存されている。伏木地内では、「藤井能三」を偲ぶことができる唯一の遺構である。

【金比羅神社の絵馬】:伏木錦町の「松本与三吉」らにより、奉納された板絵馬がある。絵馬の製作は絵師より、明治初年頃と推測されている。

【堀田善衛を記念する海風会館】: 伏木中学校には、富山県初の芥川賞作家である伏木出身の「堀田善衛」を記念した「海風会館」がある。著作物などの展示と保管がなされている。

イ／新湊地区

【内川】: 内川は、放生津潟と庄川を結ぶ運河状の河川で、約3.6kmの距離を東西に流れている。江戸時代の記録によれば「幅20間、深さ3、4尺」を測ったという。

【日枝神社の鳥居と玉垣】: 合掌形態の鳥居は、瀬戸内海の御影石で造られている。地元の廻船問屋である「湊屋清右衛門と北野屋与八」が寄進している。境内を囲む「玉垣272柱」には、兵庫の海商として、大きな勢力を誇った「北風荘右衛門」をはじめとする、北海道から大阪までの廻船問屋と、その所有する北前船の名前が刻み込まれている。

【昆布絵馬】: 「放生津八幡宮」にある「昆布絵馬」は、海産物を商っていた「京屋九右衛門、伏木屋善四郎、川口屋仁左衛門」により奉納された。中国の故事で、不老不死の薬を求めて東征した「徐福」を題材にした「絵馬」である。

【放生津八幡宮の大常夜燈】: 御影石製の1対の巨大な常夜燈で、背後に灯明のための石段が設けられている。境内の周囲の玉垣も「廻船船方中」により奉納されたものである。

ウ／ 岩瀬地区

【諏訪・恵比須社の絵馬】: 岩瀬萩浦町の諏訪・恵比須社には、県内で最も古いとされる、1819年(文政2年)銘の北前船の船絵馬がある。

【金刀比羅社の常夜燈】: 金刀比羅社の境内には、江戸時代末期に設けられた常夜燈がある。石製方形で、「佐渡屋傳次郎」により、1865年(元治2年)に奉納された。

【長者丸の太三郎の墓】: 太平洋に漂流した長者丸に乗船していた、「鍛冶屋太三郎」は、1865年(天保14年)に帰国した。帰郷してからも、加賀藩の取り調べなどを受け、1849年(嘉永2年)に、48歳で他界した。その墓がJR東岩瀬駅近くにひっそりと建立されている。

【西岩瀬諏訪社の大ケヤキ】: 西岩瀬の海岸に接する諏訪社には、樺の大木がある。樹齢は数百年とみられており、富山湾から四方へ入港する「北前船の目印」とされていた。

【西岩瀬諏訪神社の常夜燈】: 西諏訪岩瀬諏訪社の境内には、西岩瀬の「船持中」により奉納された奉納された1対の常夜燈が建立されている。

【四方神社の絵馬】: 四方神社には、「中浜伝治」により奉納された「絵馬」が1枚ある。北前船の「徳寿丸」の帆走する様子が画面いっぱいに描かれている。

エ／ 水橋地区

【金刀比羅神社の鳥居】:金刀比羅神社は、1877年(明治9年)に、廻船業を営む有志により建立された神社で、石製の鳥居は、1897年(明治29年)に設けられている。

【舂場跡】:白岩川の河口には、昭和63年に設けられた舂場跡の記念碑がある。かつては、沖に停泊した北前船まで舂が通い、荷物の運搬が行なわれた。

【水橋恵比須社の絵馬】:水橋恵比須神社には、「鍋谷秀次郎」ら3名により、1878年(明治10年)に奉納された板絵馬がある。

【石黒屋権吉の手水鉢】:水橋神社の境内には、「石黒屋権吉」が、奉納した石製の手水鉢がある。正面には、奉納した、1852年(嘉永5年)の文字が彫られている。背面には、朝日丸「権次郎」など、6丸6名が彫られており、石黒家一族の沖船頭と所有した、北前船の名称と考えられる。

【第3編 北前船の果たした役割】

①藤井能三の活躍

ア／藤井能三(ふじいのうそう)は、屋号を「能登屋」と称した、伏木の北前船廻船問屋の八代目当主である。弘化3年(1846)に生まれ、大正2年(1913)に68歳で没した。その生涯において、社会資本の整備、経済の活性化、教育の推進に尽力し、富山県の近代における発展の基礎を築いた偉人である。

イ／社会資本の整備明治8年(1875)に、「藤井能三」の尽力により、「三菱会社」の同社の「瓊浦丸」と「豊島丸の2艘」が、伏木港へ「西洋型汽船」として初めての入港を果たした。1878年(明治10年)には、本県初の近代的な灯台である「伏木灯台」を私費で建設した。

明治11年には、電信の開設を請願し、翌年には、高岡と伏木間に電信線が架設された。さらに、私財を供して明治16年に、本県初の気象観測施設である「伏木測候所」を開設した。

何よりも大きな功績は、伏木港の整備である。1884年(明治17年)に有志が合同で「伏木港築港ノ議ニ付請願」を国重正文県令に提出し、伏木港の近代的な築港は、富山県としての利益につながることを強調した。

しかし、港湾整備の着手には、あまりにも巨額の経費を要することから、事業採択は延び延びとなり、1900年(明治33年)に、「内務省の直轄工事」として開始された。

ウ／経済の活性化

「藤井能三」は、元号が「明治」になるやいなや、加賀藩から「商法・為替・廻漕会社」の棟取を命じられ、この役職は1871年(明治4年)に、「金沢為替会社」の頭取として引き継がれた。この会社は、1884年(明治17年)に、私立の銀行へと発展した。

1883年(明治16年)には、「第十二国立銀行」の設立とともに取締役となり、現在の「北陸銀行」の基礎を築いている。また、1881年(明治14年)に、「射水郡農商協会」、同16年に「高岡米商会所」を設立するなど、取り扱い物資の価格安定と供給安定を図った。

明治14年には、本県初の汽船会社となる「越中風帆船会社」を設立し、「北陸通船会社」などいくつかの船会社を次々と設立していった。

これは、日本海における海運業の活性化を促すものであり、地域の経済力の底上げに大きな効果を及ぼすことになった。

エ／教育の推進

明治6年(1873)の1月に、「藤井能三」は、新川県の参事あてに願書を提出し、住民は「時勢ト道理トニ暗」ことから「文明開化の域に趣」せることが急務であり、「一日後ルレハ百年ノ損失」として「速ニ小学校設立」が必要であることを力説した。

この年の2月には、県下初の公立小学校である伏木小学校が開校している。開校にあたっての教師の確保や、校舎の建設などは、「藤井能三の私財」でまかなわれた。

「伏木小学校」では現在でも、「能三祭の開催、記念室の設置、銅像の建立」などをとおして氏の偉業を讃えている。

②築港と河川改修

ア／伏木湊と小矢部川・旧射水川は、小矢部川と庄川が合流し富山湾に流れ込む河川であり、伏木湊は江戸時代の内陸水運による物資の集積地として、また、北前船による物資の積み出し基地として、重要な役割を果たしていた。

次第に、土砂堆積により河口が閉塞しはじめたこと、直接汽船が着岸できる岸壁が、必要となってきたこと、地元で「期成同盟会」が結成されたことなどにより、1900年(明治33年)に内務省の直轄工事として改修工事が開始された。

事業の内容は、庄川の河身新設、川幅の拡幅、伏木港の浚渫と岸壁建設から成り、大正元年(1912)に竣工した。

これにより、「3,000トン級」の船が入港できる「近代港湾」としての整備が完成した。さらに、河口が分離され、現在に見る「小矢部川と庄川」の2本の河口ができあがった。

イノ岩瀬湊と神通川東岩瀬は、神通川河口右岸の天然の良港であったことから、1670年(寛文10年)に、加賀藩の米倉である御蔵(おくら)が設けられ、北前船の拠点として繁栄した。

「西岩瀬」は、神通川河口の左岸の良港であり、四方とともに、富山藩の物資の移出入の拠点として繁栄した。

1901年(明治34年)に、神通川のショートカットとなる、馳越工事が開始されたことを原因として、河口に土砂が急激に堆積しはじめ、港への船の直接乗り入れができなくなってしまった。

そこで、北前船で財をなした、「森正太郎、馬場道久、米田元吉郎」などの有力者からなる「東岩瀬商工会」等が尽力し、順次、突堤の築造、地先の浚渫、河道と港の分離、河道の新設といった大工事が、内務省の直轄工事として実施され、1928年(昭和3年)に竣工した。

これにより、「1,000トン級」の船が着岸できるようになり、近代港湾として、現在の富山港となった。

ウノ水橋湊と白岩川旧水橋川は、白岩川と合流した常願川が、富山湾に流れ込む河川であり、河口の水橋は白岩川を利用した、内陸水運の湊として栄えた。加賀藩の米倉である御蔵も設けられ、江戸時代後期には北前船の拠点として繁栄した。

1891年(明治24年)に、富山県の要請を受けた政府は、内務省工師「ヨハネス・デ・レーケ」を派遣した。「デ・レーケ」は、勢力的に現地調査を行い、常願寺川の改修の設計を行った。

これに基づき、堤防の強化、合口の用水取水口の設置、河身の付け替え工事が実施され、1893年(明治26年)に、完成した。これにより、常願寺川は、西水橋の西側に新たに河口が設けられ、白岩川の河口と分離することにより、土砂堆積の問題は解決された。

③文化の普及

アノ教育の振興

江戸時代の漂流をテーマとして、研究に取り組んでいる「キャサリン・プラマー」は、その著書『最初にアメリカを見た日本人』において、「長者丸」で漂流した東岩瀬浦方の「次郎吉」の学力を高く評価している。

次郎吉の記憶力の確かさ、知性、スケッチの芸術性などに才能を認め、さらに、わずか10箇月間の英語の習得を特筆している。伏木の「藤井能三」は、県下初の公立小学校である「伏木小学校」を開設し、本県における初等教育の礎が築いた。東岩瀬の「馬場はる」は、旧制富山高等学校(現、富山大学)の創設には、力をいれ、1923年(大正12年)に、県へ多額の寄付を行い、「富山県教育の母」といわれている。

イ／食文化と民謡

一所帯あたりの、「昆布の消費金額」は、富山市が全国のトップで、ダシ用、副食用、おやつ用と多彩であり、食生活には欠くことのできない食材となっている。

なかでも、「昆布巻き蒲鉾」は、富山県では日常的に食卓を彩る食品である。ニシンは、現在では高級魚で、身欠き(みがき)ニシンをくるんだ昆布巻きとし食卓に供される程度であるが、富山独特の食品として根強い人気がある。

伏木で伝承される「伏木帆柱起祝唄」は、北前船の出航を示す帆柱起しを祝った民謡である。新湊で伝承される「新湊めでた」は、九州の馬渡島から北前船により日本海側沿いに伝わってきた「まだら系統」といわれる民謡である。

岩瀬にも、同系統の「岩瀬まだら」という民謡が伝承されている。入善町の吉原には「吉原木遣り」が伝承されている。

④諸外国との接触

ア／長者丸の漂流

1838年(天保9年)の4月、富山藩領内の湊である西岩瀬から出航した、「長者丸」は、大阪、新潟、北海道の松前を経て仙台まで航海し、11月に仙台沖で暴風雨に遭遇した。

10名の乗員を乗せたこの船は、太平洋を漂流し、翌年の3月にアメリカの捕鯨船「ジェームス・ローバー号」に救助された。救助された乗員は、「ハワイ、カムチャッカ半島ウスト・カムチャック、シベリアのオホーツク、アラスカのシイトカ」へと移動し、1843年(天保14年)に、ロシア船で「エトロフ島」へ送還された。

無事帰国した乗員は、「鍛冶屋太三郎、米田屋次郎吉」ら6名であった。長者丸の漂流については、「次郎吉」の口述をまとめた『蕃談』という記録集と、加賀藩の高官(定番頭兼御算用場奉行)で自然科学に知識の深かった、「遠藤数馬高環」により、詳細にまとめられた『時規物語』(全10巻25冊)という著作物により、知ることができる。

様々な国際的な情報が、「次郎吉」らによって鎖国下の日本にもたらされ、「遠藤」ら知識人にとって最先端の情報として、活かされたことが考察される。

イノ日本海の交易

新湊の南島家は、1804～1830年(文政年間)に、「放生津」に進出し、廻船業を始めたとされる。「南島間作」は、1886年(明治19年)に26歳で家業を継ぐとともに、「ドイツ汽船」の「奈古浦丸」(1,084t)を購入し、「1箇月に2航海半」もの北海道交易を行ったとされる。さらにウラジオストクとの航路を計画したが、これは実現されなかったものの、1895年(明治28年)には、「中国大陸」との「定期航路」を開設し、日本海における交易の活性化を図った。

北前船主による北洋漁業の開始は、1891年(明治24年)頃とされ、沿海州や樺太で、「鮭・鱒の捕獲」を行ったことが記録されている。

ウノ密田家と薩摩貿易加賀藩に、次ぐ大きな石高であった「薩摩藩」は長らく、緊迫した財政状況にあったが、幕末には、「琉球」を介した、「中国との密貿易」により、財政の立て直しを行い、「明治維新」を率先する筆頭雄藩となる。越中の北前船は、この密貿易に大きな役割を果たしている。

1849年(嘉永2年)、薩摩藩は、越中の売薬商(薩摩組)に対して、領内での営業の条件として北海道からの昆布の輸送を申し付けた。

中国では、貴重な昆布の需要が大きく、これに着眼した調所広郷の施策であった。薩摩組の中心であった「密田家」(富山市荒町)の古文書からは、北前船による北海道での昆布の仕入れ、その航路や売買の状況を知ることができる。

⑤北前船の富と産業形成

アノ銀行業の形成

明治政府は、近代的金融制度の確立のためにお札(太政官札)の発行や、国立銀行条例の公布などを推し進めたが、北陸の北前船主は、その蓄積した「財産」を新たな銀行の設立に積極的に投資した。

明治10年代は、資本の提供という性格が強かったが、北前船が斜陽となる「明治20年」代からは、北前船主による自主的で積極的な「銀行経営」がなされるようになる。

明治時代に、創立された、これら多くの銀行は、昭和になってから「合併集約」され、現在、北陸地方の経済を支える「地方銀行」として成長している。

イノ近代産業の育成

北前船によって蓄えられた富(資本)は、「電力業、米穀・肥料業、保険業、運輸業、水産業、倉庫業」投資された。明治時代後半から大正時代にかけて、北陸地方では、河川の急勾配と豊富な水量を活用した「水力発電」が盛んになる。

米穀・肥料業では、北前船による北海道への、米の移出と魚肥の移入を専らとした船主も多く、大地主として地域の発展を促した。

明治時代の「高岡米穀取引所、高岡肥料、富山米穀株式肥料取引所、北陸人造肥料、新湊商業、岩瀬物産」などの役員には、廻船問屋の船主が名を連ねている。

ウノ売薬業の助長

富山売薬は、江戸時代中期に行商により、全国に販路が設けられたが、日本海沿岸を結ぶ、西廻り航路の確立とともに、大阪方面には売薬が北前船の積荷として送られ、また、大阪などで買い求められた原料は、北前船で富山まで運搬された。

安定した運輸方法の導入により、売薬業は発展し、一層の販路の拡大がなされた。

富山の「密田家」は、薩摩藩の命を受け、北前船による北海道からの昆布の運搬を行い、薩摩藩の財政建て直しを担い、明治維新への原動力となった経緯は、あまりにも著名なエピソードである。

⑥北前船文化の群像

アノ「嵯峨寿安」(学ぶ心を持って日本人ではじめてユーラシア大陸を単独で横断。

1869年(明治2年)に、「寿安」は、金沢藩から「ロシア留学」を命じられた。船で日本海沿岸のウラジオストクに渡り、ユーラシア大陸を横断した。

明治4年5月20日に、31歳の寿安は、ロシア船「エルマーカ号」に乗り、函館港からウラジオストクに向けて旅立った。目的地の「ペテルブルグ」に、「8ヶ月以上」もかかり到着した。帰国した寿安は、明治7年(1874)政府から、「北海道開拓使御用係」、明治9年には、「東京外語学校」の教官となったが、これも翌、明治10年には退官し、一旦、岩瀬に戻り医者となった。

晩年は、明治29年(1896)頃、サハリン島の「コルサコフ」(大泊)に滞在し、翌年には、参謀本部の広島師団でロシア語を教え、1898年(明治31年)に広島で亡くなった。

現在、寿安の偉業を刻んだ石碑(1936年建立)が、岩瀬小学校の前庭にある。

イノ堀田善衛(国際的視野を持った芥川賞作家堀田善衛)

伏木の北前船廻船問屋に生まれ、港に出入り利する北前船を見つめながら、海外への思いを膨らませ、やがて、本県初の芥川賞作家となった人がいる。

江戸時代から続く「鶴屋」で育った堀田善衛(ほったよしえ)である。善衛は、大正7年(1918)、現在の高岡市の伏木において、代々廻船問屋を営んでいた家に生まれた。大正時代になると、それまで活躍していた北前船に代わり蒸気船が登場し、その結果、かつて商売繁盛した善衛の家も経営が苦しくなった。

「善衛」は、かつてあんなに栄えた、自分の家が「倒産」するのを見て、「万物は流転する」とか「諸行は無情なり」ということを、子ども心に身にしみて体験した。

そのことが、善衛の文学の根本となる『繁栄するものは、かならず滅びる』というような考え方を形づくったのだと思われる。「善衛」は、大学卒業後、就職した「国際文化振興会」から上海に派遣され、昭和20年上海で第2次世界大戦の終戦を迎えた。

昭和22年に帰国し、昭和26年に「広場の孤独」を中心とする作品群を対象に芥川賞を受賞された。

【第4編 北前船の活用】

①先人の英知を学ぶ

北前船は、江戸時代後期から明治時代中期にかけて、経済と社会の発展に貢献し、一世を風靡した。そこには、様々な創意と工夫がみられ、現在にも引き継がれている。先人のたゆまない努力と英知を学び取りたい。

和船は、速くて安定した構造の船に改造され、磁石など道具にも工夫がなされた。

寄港地で、積荷の売買を行うという「買積み船の方式」を採用し、ニーズに応じた弾力的な商いを行った。

「次郎吉」のように船員としての任務をこなすために、数学など様々な知識を身に付けた。

「藤井能三」のように、社会の新たな動向にすばやく反応し、近代的な思考と方法を導入するとともに、地域社会と住民の福祉の向上に努めた。

昭和62年に、岩瀬に住まいする研究者などが「岩瀬バイ船文化研究会」を組織し、様々な視点にたつ、「調査研究活動」を行いながら、『バイ船研究』という研究誌を刊行し、全国に富山の北前船文化の情報発信を行っている。

県教育委員会は「北前船 日本海夢航海」を実施し、北前船の学習と雄山丸での富山湾の航海をとおして、子どもたちの航海の知識を深めている。さらに、「北前船ロマン回廊構想実行委員会」では、子どもたちの、「北前船の模型づくり教室」をとおして、和船の構造把握と機能の理解を深めてもらっている。

②活力ある地域づくりに活かす

北前船の活躍により、町並みが創られ、人々が行きかい、郷土は活況を呈した。湊や河川の整備が進められ、現在の港町の礎が築かれていった。

その歴史を紐解き、携わった人々の意気込みを地域の活性化に役立てたい。伏木小学校では、校舎内にふるさと学習室を設け、貴重な歴史史料の展示と体験学習をとおして子ども達の郷土の文化や伝統を大切にする心の醸成を図っている。

また、岩瀬小学校では、6年生が総合学習の時間を活用して「北前船と岩瀬の関係」と題して、地域文化の詳細な把握を行なった上で、旧森家住宅を会場としてその成果の発表会を行なった。

伏木で活躍するボランティアグループは、地域の成り立ちを学習しながら、訪れる人々への解説活動を行っている。東岩瀬の「米田芳彦」さんらは、埋もれている北前船の資料を発掘しながら「旧森家住宅」で解説活動を行っている。

このように、近年、徐々に地域の成り立ちの礎となった、北前船に対する関心が高まっており、こうした活動をとおして地域に対する愛着と誇りを醸成していきたい。

③次世代へ保存し継承する

「約100年」という長い時間と、多くの人々の努力により、北前船を母体とした歴史と文化が形成された。現在でも例えば、建物、町並み、河川、港、人々の風俗や慣習などとして生き続けており、それらを保存し継承することが我々の責務である。

伏木では、廻船問屋であった旧秋元家住宅を「伏木北前船資料館」として公開し、富山市では旧森家住宅を「北前船廻船問屋森家」として公開している。

また、「岩瀬米蔵」は修復され、アトリエなどとして再利用されようとしている。馬場家住宅の前にある、ポケットパークには、北前船の銅像も設置され、憩いの場として重宝されている。

「富山港展望台」は、北前船関係者により奉納された、「常夜燈」をデザインしたもので、地域の歴史を偲ぶ拠点として機能している。

平成13年に、富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム2001実行委員会により作成された、北前船パンフレットは、東岩瀬と水橋の北前船関係の遺構などを紹介したもので、訪れた人々に喜ばれている。

景観に応じた案内板の整備などが、今後の課題であろう。何よりもまず、地域に住まいする人々がその重要性に気づくことが大事であり、住民自ら率先して現存する財産の保存に努めなければならない。

その後には、それらの活用をとおした継承を図り、かけがえのない財産として「次世代」への「すばらしい贈り物」としなければならない。

日本海学ライブラリー日本海学推進機構

日本海学推進機構〒930-8501 富山市新総曲輪1-7

<http://www.nihonkaigaku.org/library/group/i050401-t1.html>

県国際課内 TEL:076-444-3156/FAX:076-444-9612

「北前船」学習資料

資料作成/Kazuhiro Himono /2023/02/19

射水市立町12-5/0766-84-8150/email: himokazu@nifty.com